

## エゴイズム・ユニバーサリズム・アルトルイズム

豊 田 全

Egoism, Universalism, and Altruism

Tamotsu TOYOTA

### I

わが国では、エゴイズムはよくないという觀念が支配的である。だから、倫理学者の中にも、エゴイズムについて、何故に、エゴイズムが悪いのか、あるいは、反対にエゴイズムはそんなに排斥さるべきことではないのか、などについて、深く検討しようとした人が多くはない。なぜだろうか。これに対する答は、社会的、思想史的角度からなされるであろう。しかし、ここでは、この問題に立ちいることは割愛して、とにかく、エゴイズムは簡単に切り捨てらるべきでないと思うので、それについて、少しばかり注目してみようと思う。エゴイズムについて考察しようとする、いきおい、それと対称的であるアルトルイズムにも目を向けざるをえない。また、個としてのエゴ (Ego) に対するユニバース (Universe) が浮んでくるので、ユニバーサリズムについても、いくばくかの考察が必要になってくる。

大雑把には、エゴイズム、ユニバーサリズム、アルトルイズムは、自己と他の人間との関係において、どちらの側面に道德理想をおくかということによって生ずる諸見解であるということができる。

Egoism は、利己主義と和訳されたり、

自己主義と訳されたりしているが、自己本位主義とした方が適當かもしれない。しかし、いずれにしても、いかなる場合にもあてはまる完全な和訳であるとは言われえないので、エゴイズムという言葉そのままを用いることにしておく。

Universalism は、もともと、神学説の一つであって、普遍救済説と和訳されるが、この小論では道德論の一つの立場として、普遍主義とでも訳するのが適當であろう。

Altruism は、利己主義に対する利他主義と訳されたり、これに似た形で、愛他主義と訳されたりする。しかし、これらの訳語も、いかなる場合にもあてはまるとは言われえないので、アルトルイズムという語をそのまま用いることにする。

### II

エゴイズムは、厳密には、倫理学的主張の場合と、心理学的主張の場合とでは、その意味がちがう。簡単にいうことが許されるなら、前の場合のエゴイズムは、人がおのれ自身の幸福または利益を求めることは、彼の義務である、と考える立場である。後の場合のそれは、人は常に自分の幸福または利益をもとめる行動をな

す、という見解である。この見解は、また、次のように言い換えることができる。人間存在は、彼自身の幸福または利益しか求めることができないものとして造られていると。この考え方によると、人間は、他人の幸福をもとめているように見えるときでも、彼自身の幸福をもとめているのである。心理学的エゴイズムの最も一般的な形は、心理学的快楽説であり、エゴイズムに対する反駁は、大ていの場合、この説（人は本性上自己の幸福すなわち快楽を求めるものであるとなす説）に対するものである。

前者すなわち倫理学的エゴイズムは、人間が彼自身の幸福（利益）を求めるのは、彼の義務であると主張する。そして、それは、その厳密な形においては、人は他人の幸福（利益）がどうなろうと（他人の幸福が彼自身の幸福の手段である場合を除いて）、それを顧慮すべきでない、と主張する。ここで道徳的目的を完成として考えるならば、エゴイズムは他人の完成のためにほとんど何もしないべきでないことを主張することになる。しかし、これは、人は他人と何等の関係もないことを含意しない。事実として、人は多少とも他人に影響を与えることができるが、自分の活動を統御することができるようには、他人の活動を統御することはできない。カントの道徳論が、各人はみずからの完成と他人の幸福とを求めるべきことを主張したとするなら、彼の見解は、上の事実を認めた上でのものであったと考えられるが、徹底したエゴイズムは、自己の完成と他人の幸福という二つの目標を併立させようとししない。それは、人が真に統御できるのは、自己の活動のみであるという見解を更に一步すすめて、人が完全に善き（幸福な）世界のためになしうることは、彼自

身の善（幸福）の実現のみであるから、このための行為のみが、道徳的義務にかなっていると考ええる。ここに、われわれは、心理学的エゴイズムと倫理学的エゴイズムの混在を認めることができる。

またエゴイズムといえども、他人に奉仕する場合を全く無視することはできないので、それは、そのような他人への奉仕をば自己の幸福を実現するための手段としてとらえ、ほんとうの目的は自己の幸福の実現であるとなし、この実現の行為が人間の心理の自然であるし、その自然に副うことが道徳的義務であるとなすかもしれない。あるいは、人は共同の幸福を目標とすることにおいて、彼みずからの最善に達することができるので、このような方向において行為するのが、人間の義務であると主張する者がある。この立場も、究極的に求めることができ、そして求められるべきことは、各人の幸福であるとなすのであるから、エゴイステックである。これらの立場にも、すでに気づかれたであろうように、心理学的見解と倫理学的見解とが混在していることは明らかである。

エゴイズムが主張する心理学的性質が事実として存在し、そこに誤謬がないとしても、一入念に考察すると、人間の心性がエゴイズムの主張する見解の通りであるかどうかは疑わしい—その事実からして直ちに人は自己の幸福または利益を追求すべきであるという倫理的命題を導き出すのは、正しくないと思う。

さて、エゴイズムは、それが快楽説的であろうが、完成説的であろうが、それをストレートに実現しようとするとは困難に突きあたる。理知的なエゴイズムは、社会生活において、自分自

身の幸福を端的に目標とすることは、その幸福が快樂の形をとるにしても、自己完成の形をとるにしても、幸福という目標に到達するためには、不適當な道であることを知るであろう。そして自分自身の利己的諸目的の實現のためには、かえって、これらの目標を自分の眼前あまりに意識的におかない方が賢いやり方であることを知るであろう。スペンサーは、純粹の直線的なエゴイズムは自分自身の利益にとって有害であることを指摘した。(H. Spencer: Data of Ethics, Ch. 12, § Lxxix.)。他人のために配慮しない者は、他人からも配慮されない。人はたれでも彼自身の幸福を得るには、他人の援助を必要とする。ホブズは、自然の状態においては、人は他人の幸福には顧慮することなく、自分の幸福を追求するものであるが、各人がそれぞれ他人の幸福(利益)を顧慮することなしに、自己の幸福をもとめる社会においては、各人の生活は不愉快なもの、狂暴なもの、そして短いものになるであろうと主張した。(Th. Hobbes: Leviathan, Part I.)。エゴイズムに対する最も強い反駁は、それが人間の道徳的直覺に反するということである。人間の良心は、人間に彼自身の幸福よりも他人の幸福を追求すべきことを告げ、エゴイズムのように、すべての人間の常識的直覺に対立する倫理説を堅持することは不可能であると思わしめる。快樂説を主張する人が、その理論的根拠を心理学的快樂説に求めるとき、彼らは、エゴイストの間に共通である誤り、すなわち人間の性質について誤った見解をもっている。—そして前にもいったように、たとえそこに誤りがなくても、その人間の事実としての心理的性質から、道徳的義務または道徳的命令を導き出すの

は誤りであるといわねばならない。(拙著：行為する人間、快樂説批判の節参照)一。人間の衝動や欲求は、彼自身から出ているという意味において、自己のものである。しかし、これらの衝動や欲求のあるものは、他人のためにうごくことがある。たとえば、同情やあわれみの如きである。そしてこれらをもつことは、野心や欲ばりのように自分のためのものをもつことと同様に自然的である。人間の自然の生活は社会生活である。自分だけの利益をもとめ、他人によって援けられず、他人のために何等の援助もしない人は、現実の人間ではない。そのような人は、アリストテレスの言うところによると、動物か神かである。

エゴイズムは、一つの真理をもっている。それは、道徳生活における個人の重要性を指摘している。—エゴイズムは個人主義と同じではないが、自己の発見は個人の発見と無関係ではない。一人はややもすれば、社会を全体、個人を部分となし、そして部分よりも全体が優先するとの確信にもとづき、更に全体としての社会を実体としてとらえ、そして目的自体であるのは、その実体としての社会であり、個人はその手段であると考えられる場合があるが、それは誤りであって、個人こそが自由なる行為の主体であり、いうなれば、実体であることが忘れられてはならない。もしもわれわれがエゴイズムよりはむしろ普遍主義あるいはアルトルイズムを受容すべきであるとしても、われわれは、自由なる個人の幸福が道徳生活の目標であって、ある体制の不明瞭な普遍的福祉が目標ではないことを銘記しなければならない。エゴイズムが誤りに陥るのは、ある特定の個人すなわち当事者自身のみを強調することによるのである。

## Ⅲ

普遍主義は、共同体全体の福祉を追求することが各人の道徳的義務であると主張する。この場合、共同体の福祉は、当事者の利益と他人の利益とを共に含むべきであるから、それはエゴイズムとアルトルイズムとの中にあるそれぞれの要素を結合することになる。普遍主義は、人間の道徳的内観が深まるとき、ほとんど無限に拡大する可能性をもつ。人は、彼自身の仲間の幸福、彼の土地の共同体の幸福、彼の国全体の幸福、全人類の幸福、あるいは感覚をもつすべての存在者の幸福さえも追求することができる。それはまた、道徳的義務の系列に対して、せまい制限をおかないことを求めることができる。しかしながら、それは、少なくとも三つの点において批判にさらされている。

- (a) 普遍主義は具体的個人の幸福よりは共同体の抽象的幸福を示唆している。もしもわれわれが共通の幸福を目ざすべきならば、その共通の幸福とは何かを具体的に検討しなければならないが、この仕事は極めて困難であり、ほとんど不可能に近い。
- (b) 普遍主義には、自己犠牲という言葉はない。あるいは、それは自己犠牲をば幻想だとする。何となれば、われわれが共同体のために、われわれ自身を犠牲にすると、それは、結局われわれ自身のために最大の幸福をもたらす一連の行為に従事していることになるというのが、個人を全体の中に包摂してしまふ普遍主義の言い分であるからである。アルトルイズムを根源的に支えるのは、他人の幸福のために自己の幸福を犠牲にすることは正しいという人間の道徳的直覚であって、こ

の立場からすると、共同体全体の中に個人をとかしこみ、自他の観念を無視する普遍主義の試みは、良心の直覚に反することになる。

- (c) エゴイズムの見地からすると、共同体の最大の福祉の達成が常に（あるいは正常な状態において）その共同体の構成員各自の最大の幸福の達成を随伴するかどうかは疑わしい。高級な精神的財はわかつことができるが、食物のような生存に必須な基礎的な財はわかつことができない場合がある。たとえば、すぐれた絵画は、すべての人によってみられうるが、一片のパンをすべての人が食うことはできない。共同体のための奉仕の生活が、共通の幸福を追求する個人に対して十分な量の基礎的な必要財を供給するだろうという保障はない。社会がその最も無私の奉仕者が飢えるのをゆるし、社会の共同の生活必需品を欠乏せしめたことは、人々のよく知っている事実である。普遍主義は、各人の幸福の実現の十分な見通しを、それが要求するようには、与えない。

## Ⅳ

アルトルイズムは、自分の利益を顧慮しないで、他人の利益を追求することが、人間の道徳的義務であると考えている。人が共同体に奉仕するときには、彼は彼自身よりは他人のために奉仕すべきであると考えている。エゴイズムは、自己実現をはかるが、アルトルイズムは、自己犠牲をはかる。アルトルイズムが普遍主義と異なるのは、求められる幸福又は利益の他者性の強調にある。そしてアルトルイズムには、公共に奉仕することによって、自分自身の利益を間接的に求めるという主張はない。スペンサーは、完全なアルトルイズムは、完全なエゴイズムと同様

に、一般に幸福または利益を減少せしめることを指摘した。(H. Spencer: Data of Ethics, Ch. 11, § Lxxii.)。もしもある人が、他人に奉仕することに熱中して、彼自身の健康を完全に無視するならば、あるいは、もしも彼が他人のことばかりに熱中して、自分の技術をみがくことを全くしないならば、彼はアルトルイズムが要求する他人への奉仕をなすことはできなくなるであろう。宗教家、一般に熱狂的婦人の間には、他人に奉仕するのあまり、自分の健康についての注意を怠たり、その結果、病気にかかり、彼らが意図した他人への奉仕ができないで、かえって自分の病気のために他人の奉仕を必要とするようなアルトルイストが見うけられる。大ていの善良な人にとっては、人が他人のために自己の利益を犠牲にすべきことは、良心の自明の直覚の一つである。しかし目的論派の倫理学者は、この直覚を人間がもつことを基礎にして理論を構成しようとしな<sup>い</sup>。彼らの良心は彼らの理論によって誤導されているようにみえる。ラッシュダールは「自己犠牲のための自己犠牲は、常に非合理的であり、非道徳的であり、」(H. Rashdall: The Theory of Good and Evil, Bk. II, Ch. 3, § ii.—vol. II, P.70—)そして良心は、われわれが放棄する自己の利益が、われわれの隣人のためにする利益よりも少ないか、あるいは、それと等しいか、あるいは、ただか僅かばかりそれよりも大きい<sup>か</sup>か、である場合にのみ、自己犠牲を合理的だと思<sup>う</sup>、といった。もしもラッシュダールが、首尾一貫を固守しようと欲したならば、上の場合に、彼が、われわれ自身の失った利益が、そのこと<sup>によって</sup>われわれの隣人の得た利益よりも僅<sup>か</sup>ばかり大きい場合を含めたことは、彼自身を

裏切ることになる。しかし彼はこの場合人間のアルトルイステックな良識的直覚に不覚にも譲歩したのであった。また、ステイスは、あなたとの関係において、私がエゴイステックでないということの本来の意味は、あなたと私とが相当なそして衡平な満足の配分を受ける結果を生むであろうという見込みに立っていることである、という意味のことをいっている。(W. T. Stace: Concept of Morals, pp. 171, 172.)。そして彼はアルトルイズムを正義の一種に分類しているが、これは、アルトルイズムは正義を越えて、利益をうけるに値しないものにも利益を与えることにあるとする一般の見解に対称的である。一般の人の良心は、衡平ということ<sup>を</sup>唯一の原理にすることなく、極端な形の自己犠牲を是認することがある。貧しい女性が、イエスに、彼女の全財産に相当するほどの高価な油びんの油をそそいだ行為の如きは、正義の観念では説明がつかない。あのときユダによってなされたような合理的計算は、決して彼女マリアの行為を正当とはしないであろう。しかし直覚は、それを正当となす。ラッシュダールの場合にみたように、目的論派の人は、自己の利益の放棄が自分あるいは他人によるより大きな利益の獲得を意味するときのみ、自己犠牲を正当とみることができる。しかし、直覚主義的良心論派とでもいわれうる人は、自己犠牲には、それ自体に内在する正当性があると主張する。すなわち、彼らは、自己犠牲は、自然になつており、小麦の実が死んで新しく芽をだしたり、動物がその子のために自分を犠牲にするのに対応する事柄であつて、人間の良心は、この自然の理を直覚すると考える。しかし、アルトルイズムが、自己犠牲のみが道徳的に妥当な行為であ

ると主張するならば、それは誤りである。人間の良心は善についての他の直覚も与えるのである。宗教的禁欲者は、自己犠牲を善とする一つの特殊の直覚にしたがって、他の直覚には無頓着であることがしばしばである。自己犠牲が要求することと、他の原理たとえば親に対する義務が要求することとの間に現実的な葛藤が生ずる場合がある。ある青年にとって、自己犠牲の道は僅かの給料のポストを引き上げて公共のためにつくすことであると思われるかもしれない。しかし彼の両親のために家庭をつくる義務は、給料の多いポストを受けとることを要求するかもしれない。自己犠牲的行為がいつも正しい行為であるとはかぎらない。自分が楽しくつとめることのできる職業において、最もよく仲間に奉仕することになるであろう場合は、しばしばある。医学的研究にむいた才能をもっている医師は、恐らく研究室の仕事に従事することを楽しく思い、その仕事において、ある面における彼自身の完成に至ることができるであろう。そして彼は、この仕事において、チフスあるいはペストに汚染しているスラム街の患者を往診する困苦と危険においてより、より多く他人のためにつくすことになるであろう。しかし、ある人々にとっては、ひどい環境において、普通の人にとっては馬鹿らしく思われる自己犠牲が善い行為であるであろう。たとえば、賀川豊彦が日本の貧民窟にすみ、多くの不幸な人々の幸福のために自己を犠牲にしたり、シュヴァイツァーが音楽と哲学におけるすぐれた経歴を犠牲にして、アフリカのジャングルの中の未開の土民につくした如きである。このような自己犠牲の極端な場合においてさえ、事実として、当事者がそれをほとんど意識していないと

しても、何等かの自己実現がある。このような人は、とにかく彼ら自身の個性の完成にむかって、何かをなしているのである。

## V

スペンサーその他の倫理学者は、アルトルイズムの理想とエゴイズムの理想との間には協があるにちがいないと考えた。ブラッドレイは絶対的実在の世界において、自己実現の要求と自己犠牲の要求の和解の可能を認めることはできないが、道徳は現象の世界に属すると考えた。(F. H. Bradley: *Appearance and Reality*, Second Edition, pp. 415~420.)。そしてブラッドレイは『私のもち場とその義務』の把握において、この二つの相矛盾する要求の和解の困難に対して、実践的解決を与えた。道徳は、何が何でも自己犠牲を要求するのではない。チフスの流行地において働らく医師は、科学が彼の仕事のために与える薬なしに働らくこと、あるいは彼を困難な仕事に耐えさせる食物や予防薬なしに働らくことを義務だと考えるべきだ、とは誰も思わない。要求されるのは、その人のもち場、すなわち、彼の特定のまわりの事情、によって求められる犠牲である。普通の状態では、金銭が身体に香のよい油をそそぐことよりほかのことに費された方がよいとするユダは、恐らく正しかったであろう。しかし、イエスの身体に油をそそいだマリアは、自分の大きな感謝と近づきつつあるイエスの死という特別の状況においては、この一つの自己犠牲の行為は正しいと思ったのである。イエスもまたそれを義としたのである。その人のもち場によって要求される自己犠牲は、彼の自己実現のためにならないどころではなく、かえってそのための最善の方向でありうるのである。何となれ

ば、彼の特定のもち場は、彼の能力のうちどれが実現されねばならないかを、彼をして決定せしめるからである。しかも、特定のもち場において究極的に決定するものは、その人の人格の信念もしくは自己ともいわるべきものである。だからこそ行為の責任は、それぞれの行為の主体たる人が持つのである。アリストテレスが、徳を状況との関連において論じたのは、高く評価されねばならない。

われわれの道徳的目標は、アルトルイズムであるか、エゴイズムであるか、という二者択一の設問は適当でない。われわれの道徳的直感が、他人の幸福を目ざすべきだと教えるとしても、如何なる状況においても、自己犠牲が正しいとはいわれない。一見エゴイズムと思われる行為も深いところにおいてアルトルイズムに転化することもあり、また、この逆の場合もある。カントの如く、結果の如何を問わず、行為者が義務なるが故にその義務に従わんとする心情から決断するとき、そのような意志のみが善に値するとする見解は、善についての極めて単純明白な規定であるように思われるが、複雑な現実の生活においては、ヘーゲルも指摘しているように、このような心情道徳 (Gesinnungsmoral) によると、善が悪に転化する場合がある。もちろん、道徳生活から人間の心情を除外することは誤りである。個々人の心情は重視さ

るべきである。しかし、人間は、物と心とからのがれることのできない人間と人間とが織りなす社会生活を営んでいる。一口にいて人間は状況においてあることが忘れられてはならない。

— 1969. 10. 30 受付 —

### 参 考 文 献

- (1) H. Spencer ; Data of Ethics.
- (2) Th. Hobbes ; Leviathan.
- (3) 豊田 全 : 行為する人間, 明玄書房
- (4) Aristoteles Politik, neuübersetzt und mit einer Einleitung und erklärenden Anmerkungen versehen von Dr. Theol. Eug. Rolfes.
- (5) Aristotle Politics, with an english translation by H. Rackham.
- (6) Aristoteles Nikomachische Ethik, eingeleitet und übertragen von Olof Gigon.
- (7) H. Rashdall ; The Theory of Good and Evil.
- (8) W. T. Stace ; Concept of Morals.
- (9) F. H. Bradley ; Appearance and Reality.
- (10) I. Kant ; Grundlegung zur Metaphysik der Sitten.
- (11) Do. ; Kritik der praktischen Vernunft.
- (12) Do. ; Metaphysik der Sitten.
- (13) W. F. Hegel ; Encyclopädie der philosophischen Wissenschaften.
- (14) Do. ; Grundlinien der Philosophie des Rechts.
- (15) Do. ; Phänomenologie des Geistes.

---

### Summary

In this country there is a common sense that Egoism is bad, and a few men make a wider and deeper study of it. But it is the question, whether Egoism on the whole is bad or not. In this work I am going to research into the above question. When we are engaged in deeper studies of Egoism, we cannot neglect the research in Altruism that is confronted with Egoism, and farther we must notice Universalism that grasps, as a principle, a universe (whole human beings) which is confronted with Ego as individual.

The moral ideal, in so far as it refers to the relations of an individual to other human beings, may be considered under the headings of Egoism, Universalism, and Altruism.

Universalism cannot keep itself against Criticism from Egoism and Altruism. It is not fitting that we think the moral ideal as the alternative of Egoism and Altruism. It appears that Egoism and Altruism logically contradict each other. But in our actual life the above two do not always contradict each other, rather they often reconcile each other.